海の学び ミュージアムサポート　Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

開催館名　北上市立博物館

企画展名　北上川舟運と海　－つなぐ、広がる、時代を超えて－

開催期間：２０１９年9月２１日（土）～２０２０年2月１６日（日）

【企画展の内容・目的】

■近世の北上川舟運における流域各地の特徴を押さえ、地元観覧者の興味や関心を高めた上で、その先にある海を介して江戸や全国各地とつながっていたことを紹介する。北上川流域の広域的な人・モノ・文化の交流は、海と川がセットになってもたらされていたことを学ぶ機会とする。

■舟運航路体験、史料から当時の具体像をつかむ講座、流域の特徴を押さえるフォーラム、北上川舟運と物資輸送の全体像をつかむクイズを実施する。北上川流域と海とのつながりを多面的・多角的に学ぶ機会とする。

■事業全体を通して、様々なかたちで北上川と関わっている地元の方々に、川だけでなく海とつながっていることで豊かな営みや文化が育まれてきたことを再認識していただく機会とする。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

１．企画展示の内容

■開催期間：２０１９年9月２１日（土）～２０１９年１２月8日（日）

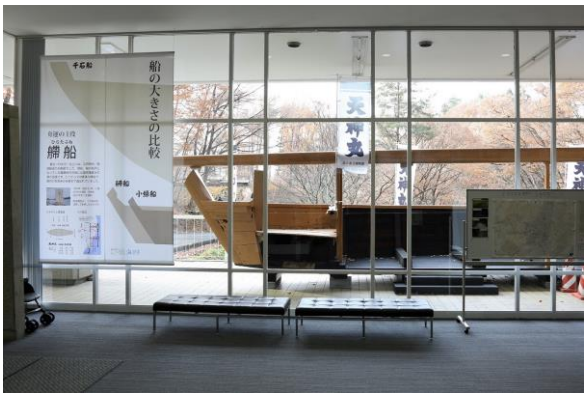
■開催場所：北上市立博物館　展示室

■入場者数：１９７１人

（巡回展示：２０１９年１２月１４日（土）～2月１６日（日）、開催場所：えさし郷土文化館、入場者数：２５００人）

北上市立博物館　外観

特別展会場　入口



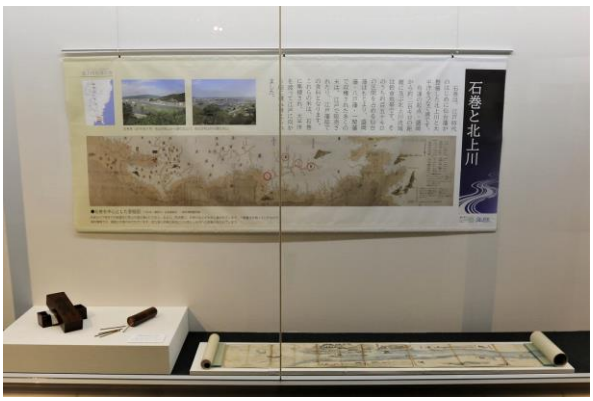
河口・石巻までの北上川航路で使われていた川船「艜船」の断面模型を製作して、博物館入口脇のテラスに設置。

まずは、入口でその大きさを実感してもらい、断面模型の船中にも立ってもらい、この川船を少人数（４人）で操作していたことに思いを馳せてもらうようにした。入館後は、窓越しに断面模型を見ながら、解説タペストリーを通して航路や要した日数等の知識を得るとともに、海運で使われた弁財船との大きさの違い等を知ってもらうようにした。

その結果、近世の人たちが、当時の技術や知恵で自然環境と対峙していたことについて実感的に学んでもらう機会となった。

また、北上川舟運は、流域だけで完結するものではなく、その先にある海を介して、江戸を主とした全国各地につながっていた点が重要だったのだという視点をもってもらう機会となった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



北上川流域が盛岡藩・仙台藩の穀倉地帯だったこと、そこで収穫された米穀を積み出すために各地で河岸が整備されたことを模型や絵図を通して紹介した。河口・石巻到着後は、クジで川船をピックアップし、厳しい米穀の数量検査が行われ、その後、海船で江戸へ運ばれたことなどについて、実物資料から紹介し、あくまでも川と海がセットになって輸送体系が成立していることを学べるようにした。

海を介してつながっていた関東諸河川の概況や河岸の様相を模型や絵図を通して紹介した。他地域の様相を学ぶ機会になったとともに、他地域の事例からも、やはり川と海がセットになって輸送体系が成立していたことを学ぶ機会となった。

川船の船頭からスタートし、海商で活躍した地元の先人の業績を商品取引に係る古文書等から紹介した。郷土の先人についての理解を深めながら、海とのつながりや海への親近感をもってもらう機会となった。特にも近世においては、流域間のつながり以上に、海を介したつながりや人的交流が密接であったことを学ぶ機会の提供ができた。

【来館者の声】

○江戸時代から海運がとても重要であったことを良く知ることができた。やはり日本は海洋国家であることがわかった。
○東北から関東への輸送のつながりを知ることができた。
○内陸に住んでいて川と陸のことしか知らなかったが、川と海は強く結びついていることを知ることができた。
○川と海は一体となりつながっており、これからもつながりを大切にしていくべき。
○北上川舟運の歴史がよく理解できた。北上川が、物資や文化・人の移動・交流手段として用いられていたことがわかった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

２．関連事業の内容

■関連事業名①　探訪会「川から海へ！」
【開催日時】２０１９年9月２８日（土）８：３０ ～ １５：１０
9月２９日（日）８：３０ ～ １７：００
【開催場所】北上川流域２８日…岩手県一関市川崎～一関市狐禅寺
２９日…一関市川崎～宮城県石巻市
【参加者数】２８日…１１人、２９日…１２人
【実施内容・目的】
●北上川の舟運航路をボートに乗り、近世絵図に記載された難所等を確認しながら辿ることで、河口に向かうまででも、大変だったことを体験する。それでも近世を通じて河口まで物資を運び続けていたことを実感してもらい、近世の物流に川と海が不可欠であったことを知ってもらう機会とする。

開催式の様子

出航時の様子

ボートに乗って水上から難所を確認、場合によっては下船して、さらに解説を加えた。写真左は、狐禅寺の狭窄部と呼ばれる山間の難所で、船を引くのに苦労した場所。写真右のように要所では下船して解説を加えながら、現況と当時の状況との違いなどについても理解を深めてもらうようにした。その結果、海に辿りつくまでにも多くの苦労があること、それを克服するために様々な工夫をしていたことなどを知ってもらう機会となった。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

水量の状況等を勘案しながら可能な限り河口・石巻の近くまでボートで向かい、下流に向かうにつれ変化する景観や川幅などを実感してもらった。写真は宮城県登米市と石巻市の境界付近にある脇谷閘門。昭和７年に完成した脇谷閘門によって、旧北上川と新北上川の水位差を克服し、船舶の往来ができたこと、近代においても、これぐらい大掛かりな装置を造るほど石巻と内陸とのつながりが重要視されていたことを知ってもらう機会となった。

ボートでの舟運航路体験後、博物館に戻り、特別展を解説付で観覧してもらった。現場でスケールの大きさを体験し、その体験が実感として残っているうちに、すぐ展示会場を観覧することで、展示資料がどういうスケールのもとで使用されたものなのかなどについて理解を深めてもらうことができた。また、川におけるスケール感をもってもらったことで、海だったらどうなのかということを想像してもらいやすくなった。それでも川と海を活用した物資輸送を行い続けた意味などについて、それぞれがより深く考える機会となった。

【参加者の声】

○航路体験したことにより、この川が海につながっていると考えると壮大な感じがした。川下りでも予定通りいかないことがあったので、海での航海も大変だっただろうと想像できた。

○川ですら難所を通るときには船がゆれて水がかかり恐怖を感じたのに、これが海を運航するとなると、昔の輸送の大変さを実感することができた。今度は海での和船体験もしてみたくなった。

○ハイリスク、ハイリターン、昔の商人と海のダイナミックな関係を学べた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■関連事業名②　講演会「「雑書」にみる盛岡藩の自然環境とその利用―海の恵み、川辺のにぎわい―」講師　兼平賢治氏（東海大学准教授）
【開催日時】２０１９年１０月１３日（日）13：30～15：30
【開催場所】北上市立博物館　多目的室
【参加者数】２７人
【実施内容・目的】
●盛岡藩の自然環境を概観したうえで、米中心の社会である近世において、かつて生産性の低い地域とみなされてきた沿岸部が、盛岡藩を支えた新興商人を多く輩出する地域であったことや、近世においては、河川と海の交通利用が人々の生活や生業のなかで重要であったことを学ぶ。

開会の様子

講演の様子

近世の文献史料・盛岡藩家老席日誌「雑書」を駆使しながら、当時の盛岡藩における海と川の活用について実証的に解き明かす講話スタイルで、その様相を具体的に学ぶ機会となった。また、当時の絵図と現況の写真を比較するなど、視覚的にもわかりやすく、海と川の活用について理解が深まるものであった。

【参加者の声】

○山→川→海と一体的に考える必要があると感じた。
○南部藩の財政が、三陸からの富によって支えられていたことを知ることができた。
○南部藩の18世紀における前川善兵衛家の活躍と、その後の新興商人達の台頭について学ぶことができた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■関連事業名③　フォーラム「北上川舟運を語る」
パネラー　熊谷博史氏（もりおか歴史文化館）、岩舘岳氏（紫波町教育委員会）、小田桐睦弥氏（花巻市博物館）、野坂晃平氏（えさし郷土文化館）、相馬美貴子氏（一関市博物館）
コーディネーター　渋谷洋祐（北上市立博物館）
【開催日時】２０１９年１０月１９日（日）１４：００ ～ １６：００
【開催場所】北上市立博物館　多目的室
【参加者数】３５人
【実施内容・目的】
●岩手県内における北上川流域の博物館等で活躍する学芸職員が一堂に会し、各地域の近世における北上川との関わりを発表、討論することで、北上川と海とのつながりが、流域に及ぶものであったことを学ぶ機会とする。

開会の様子

発表の様子

それぞれの地域における特徴を各 10 分程度で発表後、共通項などを拾い、特に水難事故や流路改修について討論を行うことで、どうしてそうした歴史事象が存在するのか（地域内だけでなく川と海による広域な交流が背後にあること）を学ぶ機会となった。

【参加者の声】

○海を介して、その先にある各地の港とつながっていたことを知ることができた。
○海と川のつながりを学んだ。海を守るために川を守るのも当然のことと思った。
○川と海に生きた人々の姿がおぼろげに見えてきた。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

■関連事業名④　「知力×体力？　クイズ！北上川舟運」
【開催日時】２０１９年１０月２０日（日）９：００ ～ １６：３０
【開催場所】北上市立博物館　展示室・ホワイエ
【参加者数】５７人
【実施内容・目的】
●来館者に展示に関するクイズ用紙を配布し、観覧しながら問題を解いてもらうことで、近世における交通網としての川と海のつながりや役割を理解してもらう。

開催場所の全景の様子

クイズを解く様子

展示をじっくり見てもらい、問題を解いていくクイズを用意し、来館者に挑戦してもらった。クイズを全問解くことで、川と海による近世の交通網や、運んだ物資などについてスムーズに理解してもらうことができた。
クイズを解いた後に、米俵１俵の半分に相当する重さの俵を持ってもらい、その重さを当ててもらうことで、たいへんな重労働であったことを体感する機会もつくった。

【来館者の声】

◯船の役割や大切さを学んだ。
◯昔の交通網が海や川だったことを知り、もっと海や川をきれいにしなければと思った。
◯北上川が江戸までつながる道としての役割を担っていたことを知った。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

【事業全体のまとめ】

●内陸部にある当市では、これまでどうしても水運は過去の話であり、陸と川だけの出来事と捉えられてしまいがちであった。しかし、「海の学び」をテーマとして各種事業を組んだことで、どの事業においても、川だけの学びで終わることはなかった。その結果、北上川の先にある海を介して江戸や全国各地とつながることにより、豊かな人やモノの交流、文化が育まれていたのだという視点をもってもらえる機会となった。

　海と川がセットになった展開という視点こそを、様々な事業を通して提供できたことが最も大きな成果である。

●北上川の舟運航路で使っていた実物大「艜船」の断面模型を博物館入口脇テラスに設置したことで、近世における川と海を利用した物資輸送のスケールの大きさを体感してもらうことができた。断面模型と合わせて、海で使われた弁財船との大きさの比較や航路を確認するタペストリーも展示できたことで、当時の流通が北上川だけで完結するものではないことを強く印象づけることができた。

　これらの成果物は、今後も引き続き展示し、多くの来館者に海と川のつながりを知ってもらう媒体となる。

●本サポート事業をきっかけに、北上川「流域圏」フォーラム実行委員会とのつながりができ、これからの事業展開に様々な可能性を広げることができた。

３．主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
１．えさし郷土文化館	巡回展示、仙台藩側の資料及び情報提供
２．流山市立博物館	関東諸河川の資料及び情報提供、HP による周知
３．一関市博物館	資料及び情報提供
４．奥州市教育委員会	奥州市教育委員会所蔵の下柳千葉家文書（舟運史料）の共同調査
５．北上川「流域圏」フォーラム実行委員会	北上川流域の実地調査

４．主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
１．「岩手日報」（新聞）	「つなぐ北上川舟運」令和元年９月２２日
２．「岩手日日」（新聞）	「北上川舟運の歴史解説」令和元年９月２２日
３．「河北新報おでかけガイド」	「北上川舟運と海」令和元年９月２９日
４．「岩手日報」（新聞）	「実物大の〈ひらた船〉登場」令和元年１０月１日

以上